



愛媛県立
新居浜西高等学校
人権教育支援課
2026(R8)年
7月発行

○はじめに

本校では今年度より、人権だより「くすのき人権通信」を発行することとしました。

人権に関する学校での取組や、日常生活の中で考えてほしいテーマなどを紹介し、生徒・保護者の皆様とともに人権について考える機会をつくっていきたいと考えています。本校のシンボルである「くすのき」は、大きく枝葉を広げ、多くの人を優しく包み込む木です。そのように、一人一人の違いを認め合い、誰もが安心して学び、互いを尊重し合える学校づくりを目指して、この通信をお届けしていきます。

○1学期人権・同和教育ホームルーム活動の紹介

- ・1年生（自分の周りに目を向けようⅠ 5/1実施）

人権意識に関する新入生アンケートの実施後、中学校までの学びを小グループやクラス全体で共有する活動を行いました。なぜ人権課題を学ぶのか、これから何を学んでいきたいのかを率直に話し合うことで、自分を見つめ、その良さや可能性にも気づき、人権を尊重する生き方や自分たちが目指す社会について考えを広げることができました。

生徒の感想より

- ・中学校によってみんな異なる学習を行っていました。また、同じテーマでも様々な観点から活動を進めていて、そうした学びを高校でも深めていきたいと思いました。
- ・グループ内での話し合いでは、聞いたことのない人権課題について知識を深めることができました。最後に先生のお話を聞き、「相手のことを大切に思うと同時に、自分のことも大切にする。自信を持つ」ことが重要なんだと知りました。

- ・2年生（部落差別はいかにしてつくられたかーその起こりと「解放令」ー 5/22実施）

2年生では、年4回の構成で「人権の歴史」を学んでいきます。今回は、「中世の差別の起こり」「近世の固定化」「差別と闘う民衆」「明治の解放令の不備」等、盛りだくさんの内容ですが、各クラスそれぞれに焦点を絞って活動が進められていました。

生徒の感想より

- ・社会の現状に疑問を持ち差別意識に飲まれないようにする。過去に起きたことを正しく学び、何が課題だったのかを考えていくこと。これらを大切に学んでいきたいと思えます。

- ・3年生（確かな進路保障のために一就職差別の解消ー 5/22実施）

3年生では、今回の「結婚差別」と併せて、差別解消への実践力の育成に焦点を当てています。同和問題によって進路や結婚の機会が損なわれてきたことは大きな問題です。そうしたことに対し、これまでの人権・同和教育が一定の成果をあげてきたことなども確認しながら、さらに前進した社会の創造に関わる人材として成長していったほしいと思います。

生徒の感想より

- ・差別につながる質問に答えることは、差別に加担することにつながる事が分かった。質問の意図に気付く力が持てるよう、学習を深めていきたい。



○人権作文紹介

1・2年生の皆さんには夏季休業中の課題として、人権作文の制作に取り組んでもらいます(3年生は任意)。これまでの学びや経験をいかして、人権意識の啓発につながる作品を期待しています。昨年度優秀作を改めて紹介しますので、参考にしてください。

『共有と対話』<新居浜西高等学校3年生(当時2年生)>

私のスマートフォンの連絡先には、たった一つだけ海外由来の名前が登録されている。それは、昨年留学でエストニアからやってきた友人の名前だ。共に過ごしていた時にはあまり意識せずには呼んでいた名前だが、改めて見たとき、彼女とのかけがえのない思い出が鮮やかに甦ってくる。それと同時に、奇跡に近いこの出会いが与えてくれた、様々な思いや感動が溢れ出てくるのだ。

最初に彼女と出会った時、私は正直なところ少しだけ戸惑っていた。言葉の壁、文化の違い、そして何よりも関わり方への不安があった。きっと多くの人が、異なる国籍の人と出会ったときに感じる、あの微かな距離感があったのだろう。しかし、この気持ちを変える出来事が私にはあった。

ある時、彼女がパグの絵を描きながら、この犬が好きだと教えてくれた。私は共通の好きなものがあると知ってうれしくなり、それをきっかけに積極的に話すようになった。これが、彼女が帰国した今でも、時々連絡を取り合うほどの仲になった始まりだった。

このことを通して、大切なことを二つ学んだ。一つ目は、「共有」と「対話」をすることで国籍を越えて仲良くなれるということだ。共通の話題があったことで、私たちは共に心を開くことができた。言葉が完璧でなくても、好きなものを共有する喜びは国境を越えて伝わるのだということを実感した。もしあの時、話しかける勇気を持たなかったら、この素晴らしい友情は生まれなかった。この勇気がどれほど大切であるかを、私は身をもって知った。違いへの不安に負けることなく、その小さな勇気を発揮することで人と人はつながることができるのだ。

二つ目は、自分のことを隠さずに話すことで距離が縮まるということだ。私が犬好きであることを素直に伝えたからこそ、彼女も自分の心を開いてくれた。互いに趣味や考えを正直に話すことで、国籍や言葉の違いを越えて深い理解が生まれた。これこそが、真の友情への大きな一歩だったのだ。

人権とは、すべての人が尊重され、差別されることなく生きる権利のことだ。しかし、権利を主張するだけでは十分ではない。一人ひとりが、異なる背景を持つ人々を理解しようとする努力と、心を開いて対話する姿勢を持つことが必要不可欠なのだ。

現代社会では、グローバル化が進み、私たちの周りには様々な国籍や文化的背景を持つ人たちがいる。そうした中で、表面的な違いに目を奪われてはいけない。人として自然に共通する部分に目を向けるべきである。好きなもの、大切なもの、喜び、悲しみ、これらの価値観や感情は、国籍に関係なく人類共通のものなのだ。

私とエストニアの友人との友情は、まさにこのことを証明してくれている。異なる国で生まれ、異なる言語や環境で育ったが、パグへの愛という共通点から始まって、互いの人生や夢について語り合えるようになったのだ。

彼女と過ごした日々が、人権の実現には一人ひとりの小さな行動が大きなカギになるということを知ってくれた。もちろん法律や制度も大切だ。しかし、それ以上に、個人が持つ「違いを受け入れ、理解しようとする心」と「対話する勇気」こそが、人権を尊重する社会を築く基盤になるということに気付かせてくれた。

この経験があったことで、私はこれからも新しい出会いを恐れず、積極的にコミュニケーションをとっていこう。そして、一人でも多くの人と心の架け橋を築き、互いを尊重し合える関係を作っていきたい。なぜなら、それこそが人権を守り、誰しものが幸せに生きていける社会を実現する第一歩になるからだ。彼女が与えてくれた奇跡を胸に、これからの人生を歩んでいく。

